

札幌市方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査 ～変化を支配する拘束要因マップの提案～^[1]

高野 照 司

Shoji TAKANO

目次

1. はじめに
2. 先行調査 (小野1991・1993) の概要
3. 前回報告 (高野2014) 以降の研究成果
4. 山鼻実時間パネル調査：これまでの成果の総括
5. 変異理論的観点からの考察
6. おわりに

[Abstract]

A Real-time Panel Study of Standardization of Nominal Accents in Sapporo Japanese: Mapping the Linguistic Constraints

As a follow-up to Takano (2014), which dismissed the possibility of lifespan changes in uses of Sapporo Japanese nominal accents by the older generations (60s and 70s), this study investigates the same variable based on real-time panel data from the younger generations (20s, 40s, and 50s). The results demonstrate that the accentual patterns of younger subjects are more standardized than those of the older counterparts, and that lifespan changes are hardly observed over a quarter century in accord with Takano's (2014) findings. This study also identifies the potential linguistic constraints that have affected the standardization of nominal accents in Sapporo Japanese, and proposes the mappings of such constraints for accounting for the processes of accentual changes in the past as well as predicting the future course of change in nominal accents in Sapporo Japanese.

1. はじめに

本稿は、札幌市方言名詞アクセントの共通語化に関して、筆者が札幌市山鼻地区で2010年から継続的に行っている実時間パネル調査^[2]から成果の一部を論じる。2014年9月発刊の北星論集(文学部第52巻・第1号)に掲載済みの調査報告(高野2014)の続編として、前稿で扱った老年層話者よりも若い世代(50代・40代)に焦点を当て、「生涯変化」(個人語の経年的変化)の動態を記述することを第一の目的とする。また、幾世代にもまたがる経年変化の推移を捉えるために、これまで行ってきたパネル調査とは別に、20代大学生からも同一文での読み上げ音声を集集し、分析用コーパスに追加した。

本稿における第二の目的は、変異理論(Labov 1972, 1994, 2001, 2010)に基づき、過去四半世紀にわたり札幌市方言名詞アクセントの経年的変化を支配してきた拘束要因の割り出しと、当該要因間の相互的力関係を階層化した「拘束要因マップ」を提案することにある。共通語化という

キーワード：言語変化, 生涯変化, 共通語化, 語彙アクセント, 札幌市方言

Key words: Language Change, Lifespan Change, Standardization, Lexical Accents, Sapporo Japanese

言語変化のプロセスの中で必然的に観察される変異(揺れ)に内在する規則性(Weinreich et al. 1968)を支配すると思われる「言語内的拘束要因」の存在を仮説として提起し、その妥当性を多変量解析の一種であるVARBRULを用いた統計的手段により立証する(Labov 1972, Sankoff & Labov 1979, 松田2006)。また、この拘束要因に関しては、前稿(高野2014)で課題とした「語彙特性」(分析対象名詞の頻度や親密度)と共通語化(あるいは方言回帰)へ向けた変異や変化との因果関係を考察に含めることにより新たな知見も提供する。

2. 先行調査(小野1991・1993)の概要

本実時間パネル調査の出発点とも言える先行調査(小野1991・1993)は、1990年12月に以下のような内容で行われた。

- ・ 調査目的： 札幌市方言アクセントの共通語化の動態を知る。
- ・ 調査地： 市内で最も「札幌らしい」と言われる山鼻地区(中央区)。屯田兵にまつわる歴史が受け継がれ、札幌生え抜きの住民が多く、町内会組織も安定している。
- ・ 調査方法および被験者： 1990年12月、二会場で二日間にわたる面接調査。小学5年生20名、中学2年生20名、20代16名、30代16名、40代16名、50代17名、60代16名、70代15名、計128名(8名欠席)。
- ・ 調査項目： 調査票による単音節、単独文読み上げ、長文朗読。単独文読み上げタスクにおける名詞の語彙アクセントのみの結果が開示(表1参照, 146項目)。
- ・ 分析方法、及び、結果の概要： 共通語的アクセントを1点として加点。その結果、若い世代へ向けて着実な共通語化の進行が確認された。特に、昭和30年代生まれの「テレビ世代」から急速な加速を見せる。

3. 前回報告(高野2014)以降の研究成果

本稿では、まず第一に、北星論集前号(文学部第52巻, 第1号)に掲載した調査報告(高野2014)の続編として、老年層以下の若い世代(50代, 40代)の話者に焦点を当て、個人語の経年的変化の動態を記述する。また今回は、20代大学生から新たに収集した同一文(表1)の読み上

表1 分析対象名詞1～4拍のアクセント類型(共通語型)と具体例(小野1993より)

1拍(15項目)	I類 (○▼) II類 (○▼) III類 (●▼)	柄が(長い)・血が(出た), など5項目 葉が(散る)・日が(昇る), など3項目 絵が(うまい)・歯が(白い), など7項目
2拍(60項目)	I類 (○●▼) II類 (○●▼) III類 (○●▼) IV・V類-二拍目広母音 (●○▼) IV・V類-二拍目狭母音 (●○▼)	鼻が(高い)・船を(なめる), など12項目 橋が(見える)・紙を(切る), など12項目 花が(咲いた)・髪を(切る), など12項目 空が(青い)・船が(浮かんでいる)・糸が(太い), など12項目 箸が(ある)・松が(見える), など12項目
3拍(46項目)	A型 ○●●▼ B型 ○●●▼ C型 ○●●▼ D型 ●○○▼	机が(低い)・背中が(かゆい), など21項目 毛抜きが(要る)・力が(強い), など7項目 小麦が(取れる)・つつじが(咲く), など3項目 姿が(美しい)・命が(惜しい), など15項目
4拍(25項目)	○●●●▼ ●○○○▼ ○●○○▼ ○●●○▼ ○●●○▼	そろばんが(うまい), など 挨拶を(する), など 果物を(食べる), など 大雨が(降る), など 弟が(いる), など

※表内下線部については、3.4節で言及

札幌市方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査

げ音声も分析に加え、札幌市方言名詞アクセントの経年的推移を捉えてみたい。

- ・ **被験者**： 1990年当時の60～70代を除く97名を再調査の対象として本実時間パネル調査が始まったが、山鼻での臨地調査は現在の40代話者（前回調査当時20代）と30代話者（前回調査当時は小・中学生）を中心に継続中である。^[3]

本稿では、前回報告（高野2014）で扱った老年層話者（70代8名・60代9名）を除く、50代・40代・20代の話者17名（男7・女10）について詳細を報告する。なお、50代話者（前回調査当時30代）は、高度経済成長期を背景に、テレビが家庭に爆発的に普及した時期に言語形成期を迎えた「テレビ世代」であることもここで指摘しておく。

➤ 50代（前回調査当時30代）話者6名 [男3・女3]

➤ 40代（前回調査当時20代）話者5名 [男2・女3]

※30代話者（前回調査当時小・中学生）については、現在も調査を継続中。

➤ 20代大学生6名 [男2・女4] 本パネルデータの継続性を経年的に確認するため、札幌市生え抜きの大学生6名を新たに追加した。

- ・ **調査項目および分析方法**：小野（1991・1993）に同じ。

3.1 拍数による経年比較

表2は50代話者6名（男3・女3）、表3は40代話者5名（男2・女3）、表4は20代話者6名（男2・女4）の共通語化の割合を、1990年調査と本パネル調査（2010～2012年）それぞれで示した。それと対応し、グラフ1～3（50代6名）、グラフ4～6（40代5名）、グラフ7～9（20代大学生6名）では、名詞拍数による共通語的アクセントの産出の割合（%）を各被験者ごとに二調査間で比較した。総点欄には、拍ごとの共通語化の割合を平均した数値を入れてある。（70代・60代話者の詳細については、前回報告〔高野2014〕を参照されたい。）

本調査における共通語アクセントか否かの判断は、個人語の生涯変化を主な分析の射程としているため、厳密に先行調査（小野1993）と同じ基準に基づいて行った。しかし、過去20年間で共通語（東京方言）自体における当該名詞アクセントの変化や新型アクセントとの併用などの可能性は否めない。また、共通語的アクセントの他に、テレビなどのメディアが広めるテレビ的アクセント型も存在しうるため、今後はそういった動的側面も加味した分析を行っていきたいと考えている。

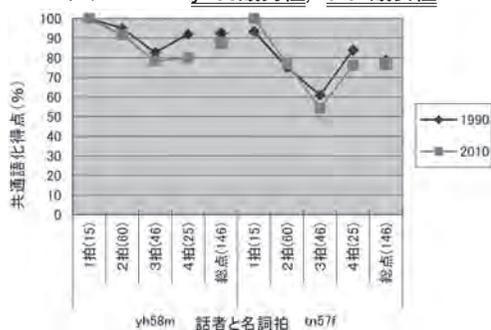
以下の各表内、及び各グラフの被験者名に付与した一重下線は、比較的顕著な（3%程度以上）共通語へ向けての変化またはそれを示す話者、二重下線は共通語化とは逆方向の変化（方言回帰または非共通語的的新型アクセントの使用）またはそれを示す話者を示す。

総点だけに注目すると、すべての話者において名詞アクセント体系全般を揺るがすような顕

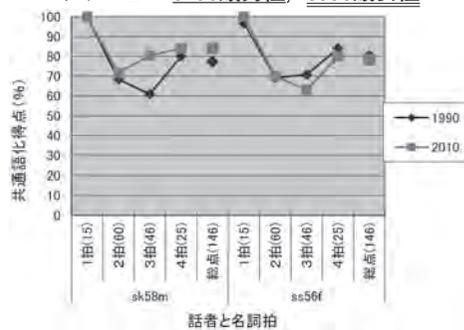
表2 50代（1990年当時30代）話者6名 共通語化指標（割合%）

	調査年	1拍名詞	2拍名詞	3拍名詞	4拍名詞	全体平均
男性話者3名	1990	97.8	85.3	77.1	<u>86.7</u>	86.5
	2011-12	100	85.6	78.3	<u>82.7</u>	86.6
女性話者3名	1990	<u>96.7</u>	74.2	<u>67.4</u>	<u>84.0</u>	80.6
	2011-12	<u>100</u>	76.7	<u>60.1</u>	<u>78.7</u>	78.9
全話者6名	1990	97.1	79.9	71.8	<u>85.3</u>	83.6
	2011-12	100	81.1	69.2	<u>80.7</u>	82.8

グラフ1: yh58歳男性, tn57歳女性



グラフ2: sk58歳男性, ss56歳女性



グラフ3: nm52歳男性, hk52歳女性

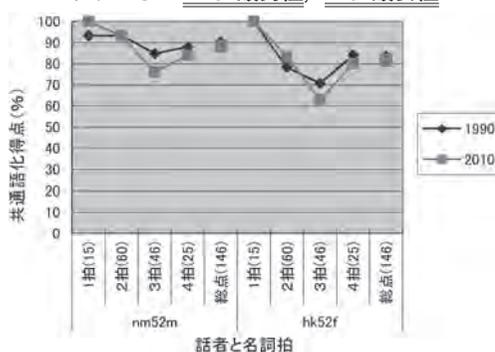
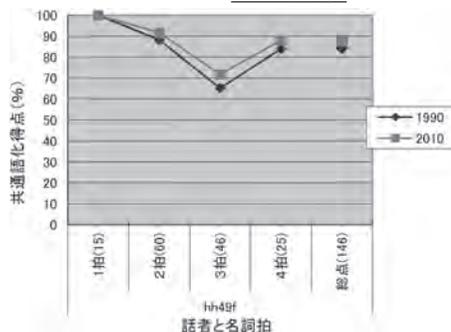


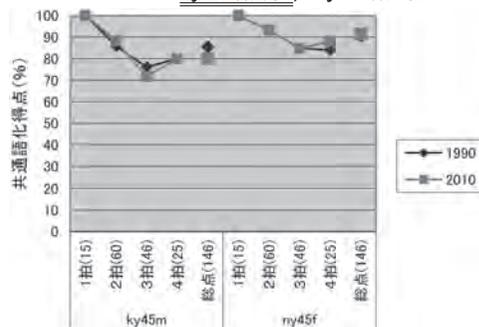
表3 40代 (1990年当時20代) 話者5名 共通語化指標 (割合%)

	調査年	1拍名詞	2拍名詞	3拍名詞	4拍名詞	全体平均
男性話者2名	1990	100	89.6	83.7	84.0	89.4
	2011-12	100	92.3	81.5	84.0	87.0
女性話者3名	1990	100	91.6	76.1	85.3	88.3
	2011-12	100	92.3	79.0	85.3	89.1
全話者5名	1990	100	90.8	79.1	84.8	88.7
	2011-12	100	92.3	80.0	84.8	88.3

グラフ4: hh49歳女性



グラフ5: ky45歳男性, ny45歳女性



札幌市方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査

グラフ6: nh44歳男性, kc45歳女性

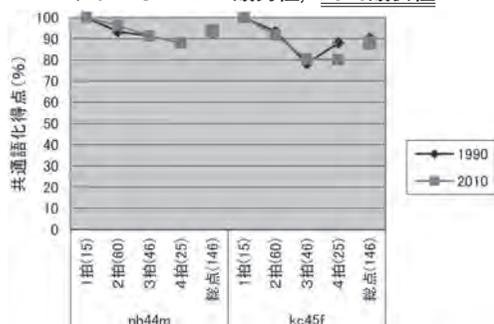
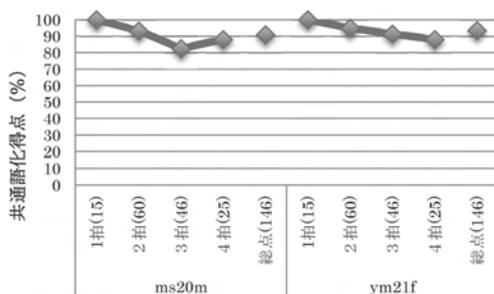


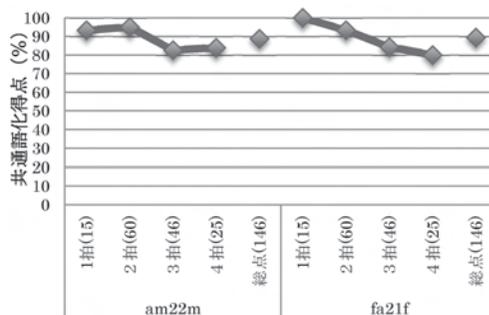
表4 (追加データ・2011年に調査) 20代 札幌出身大学生6名 共通語化指標 (割合%)

	調査年	1拍名詞	2拍名詞	3拍名詞	4拍名詞	全体平均
男性話者2名	2011	96.7	94.2	82.6	86.0	89.9
女性話者4名	2011	100	92.5	84.7	84.0	90.3
全話者6名	2011	98.9	93.1	84.0	84.7	90.2

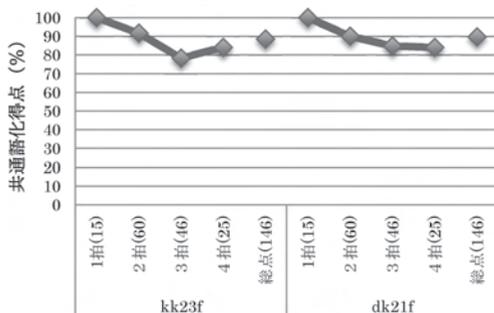
グラフ7: ms20歳男性, ym21歳女性



グラフ8: am22歳男性, fa21歳女性



グラフ9: kk23歳女性, dk21歳女性



著な生涯変化（個人語の変化）は観察されない（せいぜい数パーセント以内）。前稿（高野2014）で報告した老年層（70代・60代）話者と同様、20年程度の歳月では個人語のアクセント体系はほとんど変化しないと言える。

また、単純に名詞拍数に正比例して共通語化の進捗が鈍いというわけではなく、特に2拍名詞よりも3拍名詞へと共通語化が遅れ、1拍・4拍名詞については共通語化が進んでいる。この「V

字パターン」は40代、20代のごく少数の話者を除き、大多数の被験者間で約20年の時を経ても一貫して共有されている。なお、老年層話者（70代・60代）ではこの「V字パターン」は例外なく全員に見られる（高野2014）。

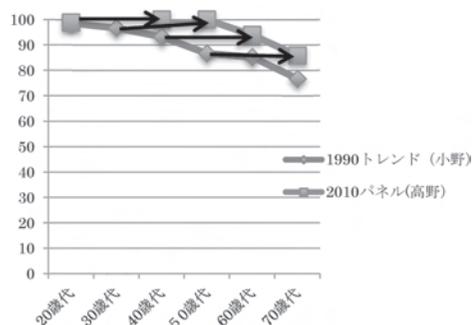
世代間差異を見ると、若い世代へ向け共通語化割合は総点においても徐々に上昇し（底上げされ）、上記のV字パターンも40代辺りから目立たなくなっていく。20代大学生では、フラットな曲線を持つ話者が半数となる（グラフ7～9）。

日本では「テレビが共通語化を助長する」という一種暗黙の了解があるが（Ota & Takano 2014）、その予想に反して、「テレビ世代」である50代・40代（1990年当時30歳代以降）には、共通語化と逆行する生涯変化を示す話者が数多くいる（二重下線話者）。特に、50代話者でこの傾向は顕著である。これは、共通語化におけるテレビの役割が、それを促進する一元的な効果を持つだけでなく、地域方言の多様化に寄与する可能性を示唆する結果として極めて興味深い（馬瀬1996, Stuart-Smith et al. 2013, Ota & Takano 2014）。しかし、この点については「方言への回帰」という解釈の他に、共通語（東京語または漠然とした「テレビ的アクセント」）そのものの経年的変化への反応という解釈も成り立つかもしれない。即ち、先行調査以降の20年間で共通語における当該名詞アクセント自体が変容を遂げ、それがテレビなどのメディアを通して全国に広まり、地域方言を多様化させたという可能性である。今後も検討課題としたい。

女性の共通語形志向は、最年長世代（70代）で若干は見られたものの（高野2014）、全般的に性差はほとんど見られないことから（cf., Trudgill 1972）、比較的若い世代の札幌住民にとって、

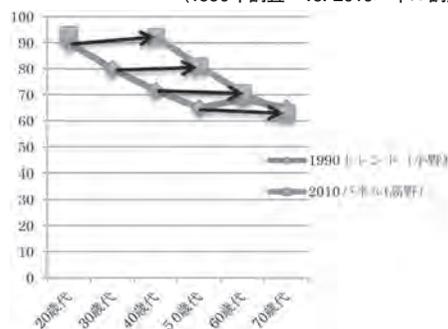
グラフ10: 1拍名詞における年齢層別共通語化割合の推移

(1990年調査 vs. 2010パネル調査)



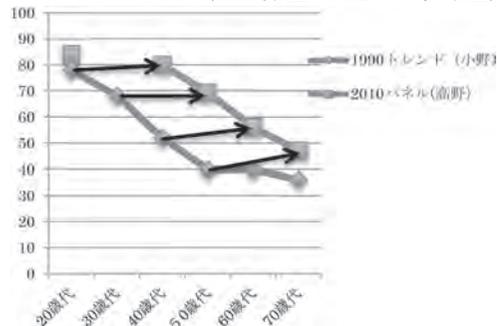
グラフ11: 2拍名詞における年齢層別共通語化割合の推移

(1990年調査 vs. 2010パネル調査)



グラフ12: 3拍名詞における年齢層別共通語化割合の推移

(1990年調査 vs. 2010パネル調査)



共通語的アクセントはもはや威信形でなくなってしまった可能性が高い。あるいは、(名詞語彙に関する限り)札幌市方言の語彙アクセントは「方言的」として明確な認知はされにくくなったのかもしれない(佐藤・米田1999)。

3.2 四半世紀にわたる経年的変化と今後の変化動向の予測

前回報告(高野2014)における老年層(70代・60代)話者を含め、共通語化の割合を年齢層別に並べ、1990年の調査(小野1991, 1993)と今回のパネル調査(2010～2012年)で比較してみると^[4]、上記3.1で確認されたように、一部の例外(グラフ12, 3拍名詞40代・50代)はあるが、共通語化の割合において加齢による変化はほとんどなく、年齢層集団への所属が横へ水平に二段階(20歳分)シフトするだけであることが分かる(例えば、グラフ10で1990年調査の50歳代集団は2010年調査では70歳代集団に所属など)^[5]。

今後も同様の規則的シフトが得られるのであれば、1拍名詞においては今後約10年程度、2拍名詞は20年程度、3拍名詞は30年程度で、札幌市(山鼻地区)の生え抜き住民のほとんどは共通語的アクセントを使用していることが推測できる。

3.3 1拍名詞における経年比較

今回のパネル調査から、50代(1990年当時30代)以下の若い世代で共通語化はほぼ完結したと言える。老年層話者の数名に見られる生涯変化については、高野(2014)の20頁3.4.2節を参照願いたい。

3.4 2拍名詞における経年比較

札幌市方言の共通語化の尺度となりうるのは、第II類(北海道方言的○●▼)名詞(橋が・紙を、など)の第III類化(○●▽)、第IV・V類広母音(北海道方言的○●▽)名詞(空が・船が・糸が、など)の同類狭母音(●○▽)名詞(箸が・松が、など)への合流の有無である(図1)。

共通語化が遅れているのは、先行研究(尾崎1986)の指摘どおり、II類名詞とIV・V類広母音名詞であり、この「W字パターン」は50代(グラフ13～15)以上の年齢層(60代・70代)の話者により共有されている(高野2014: 20-23)。40代より若い世代に向け総点の上昇とともに二つの谷は限りなく浅くなり、20代大学生では、当該要因は効力がなくなる(曲線はフラット)(グラフ16～21)。

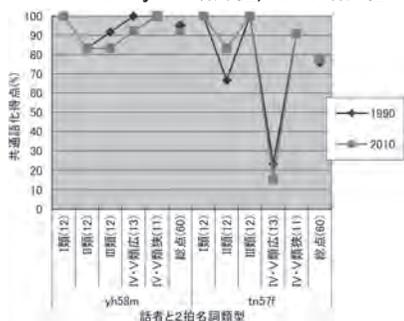
小規模ながら共通語へ向けた生涯変化(グラフ15 話者hk: 52歳女性, グラフ16 話者hh:

図1 2拍名詞における類別アクセント型: 札幌・東京(尾崎1986, 69頁)

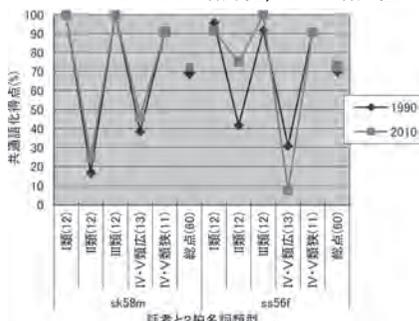
札幌 (=北奥)	第I類・第II類 /OO/	第III類・ /OO ¹ /	第IV類 _N ・第V類 _N /O ¹ O/	※Nは第2モーラが狭母音(i, u)の語。Wは広母音(a, e, o)の語。
			第IV類 _w ・第V類 _w	
東京	第I類 /OO/	第II類・第III類 /OO ¹ /	第IV類・第V類 /O ¹ O/	

50歳代 (1990年当時30歳代) 話者

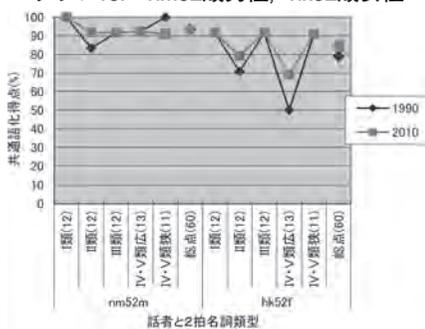
グラフ13: yh58歳男性, tn57歳女性



グラフ14: sk58歳男性, ss56歳女性

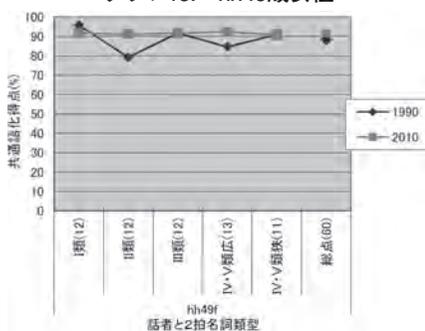


グラフ15: nm52歳男性, hk52歳女性

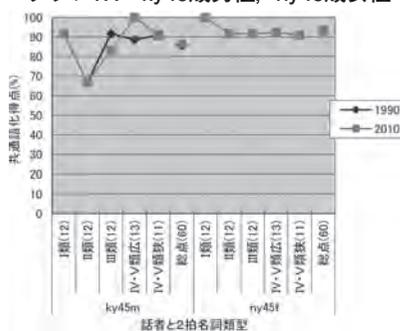


40歳代 (1990年当時20歳代) 話者

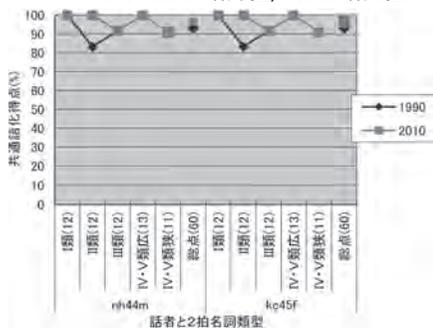
グラフ16: hh49歳女性



グラフ17: ky45歳男性, ny45歳女性



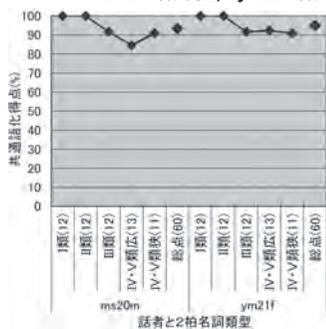
グラフ18: nh44歳男性, kc45歳女性



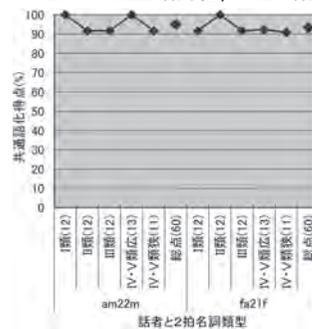
札幌市方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査

20歳代大学生 (2011年調査による追加データ)

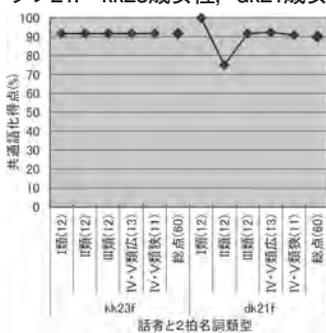
グラフ19: ms20歳男性, ym21歳女性



グラフ20: am22歳男性, fa21歳女性

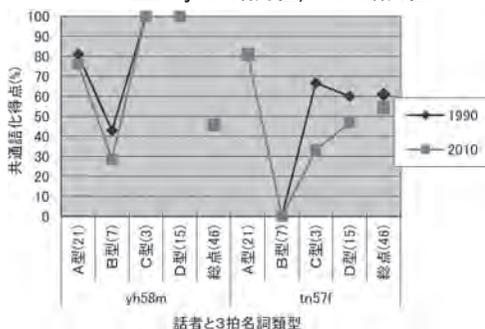


グラフ21: kk23歳女性, dk21歳女性

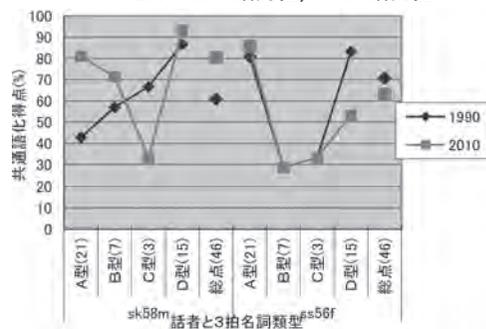


50歳代 (1990年当時30歳代) 話者

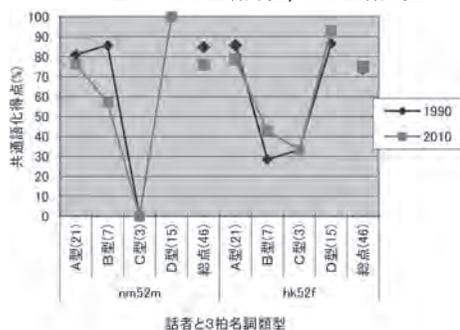
グラフ22: yh58歳男性, tn57歳女性



グラフ23: sk58歳男性, ss56歳女性

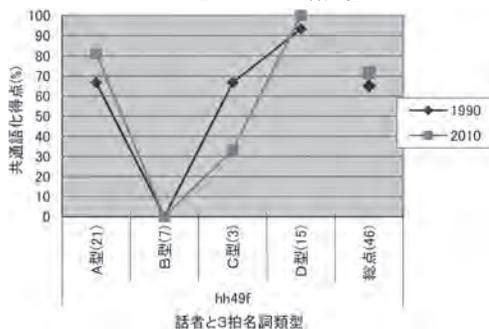


グラフ24: nm52歳男性, hk52歳女性

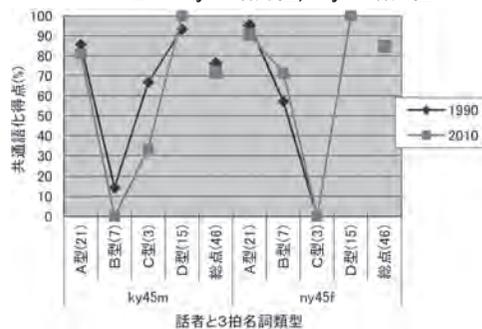


40歳代 (1990年当時20歳代) 話者

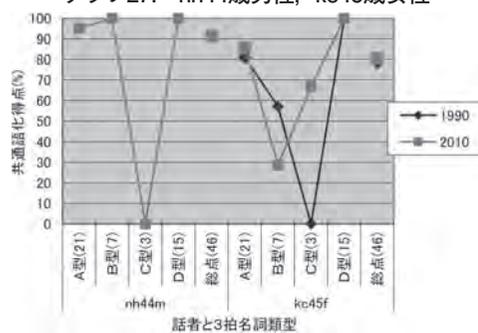
グラフ25: hh49歳女性



グラフ26: ky45歳男性, ny45歳女性

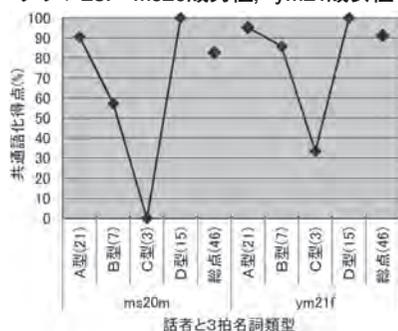


グラフ27: nh44歳男性, kc45歳女性

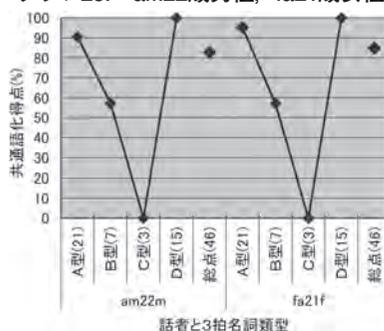


20歳代大学生 (2011年調査による追加データ)

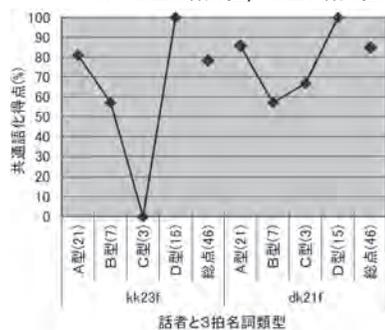
グラフ28: ms20歳男性, ym21歳女性



グラフ29: am22歳男性, fa21歳女性



グラフ30: kk23歳女性, dk21歳女性



49歳女性, グラフ18 話者nh:44歳男性, グラフ18 話者kc:45歳女性), 及び共通語とは逆行する生涯変化(グラフ14 話者ss:56歳女性, 例 IV・V類広母音のIII類化[頭高から中高へ]「空が」●○▽→○●▽)のどちらも主にこれらの類で起こっている。

3.5 3拍名詞における経年比較

大部分の話者に共通して共通語化が最も遅れている3拍名詞は, A型 ○●●▽(「机が」等)・B型 ○●●▽(「力が」等)・C型 ○●○▽(「小麦が」等)・D型 ●○○▽(「姿が」等)の4分類となる。グラフ22~30では, アクセント型間の項目数が不均衡なため, 総点欄では型ごとの割合の平均値ではなく, 総点[46]に対する得点の割合を示した。

1拍・2拍名詞とは異なり, 3拍名詞では個人差がより大きく, 共有される変異パターンを見いだすのは難しい。便宜的に項目数の少ないB型(7項目)・C型(3項目)を考慮からはずして曲線を眺めると, 年配世代(70, 60歳代)ではA型(○●●▽)がD型(●○○▽)を共通語化で先導しているが(高野2014: 23-25), 若い世代へ向けD型が追いつく(または追い越す)形をとる(表1)。50代辺りから若い世代へ向け「V字パターン」が安定的に見られるようになる。

共通語的ではないアクセントについて, 特に老年世代(70代・60代)ではA型○●●▽(机・背中, など)・D型●○○▽(姿・命, など)がともに中高であるC型○●○▽, 次いでB型○●●▽で発音されることが圧倒的に多かったが(高野2014), 今回の50代以降の若い世代では急激に共通語化へ向かう。

共通語化が遅れていると思われるB型○●●▽(毛抜き・力, など)はC型○●○▽で, C型○●○▽(小麦・つつじ, など)はA型○●●▽での発音が大凡のパターンであるが, 若い世代へ向けB型・C型ともにA型(平板型○●●▽)での発音が多くなる。

依然として規模は小さいが, 生涯変化も両方向(共通語化, 反共通語化)で見られ, 2拍名詞に比べれば規模は若干大きめである。共通語化へ向けた生涯変化は, 話者sk(58歳男性, グラフ23)で例外的に顕著である。

一方, 共通語とは逆行する生涯変化は, 予想外に, 今回の若い世代の話者に多く見られる(グラフ22 話者tn:57歳女性, グラフ23 話者ss:56歳女性, グラフ24 話者nm:52歳男性, グラフ26 話者ky:45歳男性, グラフ27 話者kc:45歳女性)。これら非共通語的生涯変化の大部分は, 主にB型・C型で見られる。B型(○●●▽)に属する「刀」「はさみ」「言葉」などはC型(○●○▽)で, 同じくB型の「小豆」がA型(○●●▽)で発音され, C型(○●○▽)に属する「小麦」「つつじ」がA型(○●●▽)で, 同じくC型の「心」がB型(○●●▽)で発音されることが多い。

20代大学生の変異で特徴的なのは, 従来の共通語的C型(○●○▽)の消滅と特に共通語化が遅れているB型(○●●▽)での方言的アクセントが6名で共有されていることである。共通語的C型(○●○▽)に属する「小麦」「つつじ」はA型化(○●●▽)で, 同じくC型の「心」はB型化(○●●▽)している。共通語的B型(○●●▽)の「毛抜き」「小豆」はA型化(○●●▽)し, 同じくB型の「はさみ」はC型(○●○▽)で安定している。他に共通語的A型(○●●▽)「あくび」はD型(●○○▽)またはC型(○●○▽)になり, 同じくA型の「柱」はB型(○●●▽)で安定している。従来の共通語的アクセント体系とは異なる体系が札幌の若年層では芽生え始めている可能性が窺える。

3.6 4拍名詞における経年比較

4拍名詞の共通語化は、どの話者においても約80%以上の高い割合を示す(表2~4)。共通語的ではないアクセントで代表的な項目は、「オルガンを」「三日月が」(○●●●▼)がそれぞれ●○○○▽・○●○○▽に、「チャンネルを」(●○○○▽)が○●●●▼に、「すずらんが」「二次会が」(○●○○▽)が●○○○▽に、「大雨が」「小刀で」(○●●○▽)が○●●●▼などに発音されている。

20代大学生では、「チャンネルを」(●○○○▽)、「二次会が」(○●○○▽)がどちらも○●●●▼と平板化し、「小刀」(○●●○▽)が○●○○▽に発音されるのが一般的である。また、「オルガンを」「三日月が」(○●●●▼)がそれぞれ●○○○▽・○●○○▽と発音されるのは年配層と同様である。

4. 山鼻実時間パネル調査：これまでの成果の総括

本節では、前稿(高野2014)で報告した老年層(70代・60代)話者も含め、これまで明らかになってきた研究成果の概要を、以下1)~3)としてまとめる。

- 1) 語彙(名詞)アクセントにおいて個人語の生涯変化は大多数の話者においては観察されない。全体の数%程度の極めて微細な変化が見られる場合はあるが、アクセント体系を揺るがすようなものではない。一方、比較的顕著な生涯変化を示す話者が例外的にごく少数見られる。

約20年程度という比較的短い歳月での観察ではあるが、本結果は、山形県鶴岡市における3回のランダムサンプリング(1950年・1971年・1991年)による語彙アクセント共通語化の経年的調査の成果に基づき横山・真田(2010)が提案する一般化(言語習得期に獲得した言語運用能力[語彙アクセント]は残りの生涯にわたって変化しうる)を支持しうるものではない。さらに、上記資料のパネルデータ分(つまり、同一話者の発話の経年的推移)を抽出した横山(2010:6)による「アクセントの共通語化は同一人物内で生涯を通じてゆっくりではあるが着実に進んでいる」とする一般化とも、変化速度の解釈部分を除いては、合致しにくいように思われる。むしろ本結果は、個人語の生涯変化を限定的に捉え、とりわけ韻律的側面は最も変化しづらいとする一般化(Chambers 2006)を支持するものとなった。

先行調査成果とのこれらの不一致点については、後節(5.3)でさらに詳しく検討する。

- 2) 小規模な生涯変化は共通語化へ向けたものばかりではなく、新種(例えば、平板化)の変化も含む。特に「テレビ世代」と言われる50代(調査I当時30代)で顕著である(cf. 横山2010)。
- 3) 単純に名詞の拍数に正比例して共通語化の進捗が鈍いというわけではなく、特に2拍名詞・3拍名詞の順に進捗の遅れが増し、1拍・4拍名詞については共通語化がかなり進んでいる。この「V字パターン」は大多数の被験者間で約20年の時を経ても一貫して共有されている。また、若い世代へ向け共通語化の割合は総点においても徐々に上昇し(底上げされ)、上記のV字パターンも40代辺りから目立たなくなっていく。20代大学生では、フラットな曲線を持つ話者が半数となる(つまり、共通語化と名詞の拍数は無関係になりつつある)。

以下、名詞の拍数ごとに詳細を述べる(表1も併せて参照のこと)。

- 3)-1. 1拍名詞 本報告の結果から50代(1990年当時30代)以下の若い世代で共通語化はほぼ完結したと言える。

- 3) -2. 2拍名詞 共通語化が遅れているのは、II類名詞（例 北海道方言的○●▼名詞 [橋が・紙を, など]）の共通語的III類化（○●▽）とIV・V類広母音名詞（例 北海道方言的○●▽名詞 [空が・船が・糸が, など]）の同類狭母音●○▽名詞 [箸が・松が, など] への合流である（尾崎1986）。この傾向は50代より上の年齢層の話者により安定的に共有されており、40代より若い世代に向け総点の上昇とともに弱まる。20代大学生では、当該要因は効力がなくなる（曲線はフラット）。

また、小規模ながら共通語へ向けた生涯変化、非共通語的生涯変化のどちらも主にこれらの類で起こっている。

- 3) -3. 3拍名詞 最も共通語化が遅れている3拍名詞では、1拍・2拍名詞とは異なり、個人差がより大きく、話者間・世代内で共有される変異パターンを見いだすのは難しい。便宜的に項目数の少ないB型（7項目）・C型（3項目）を考慮外として曲線を眺めると、老年世代（70, 60歳代）では、A型○●●▼がD型●○○▽を共通語化で先導し、若い世代へ向けD型が追いつく（または追い越す）。

共通語的ではないアクセント型について、特に老年世代（70歳代, 60歳代）でA型○●●▼（机・背中, など）・D型●○○▽（姿・命, など）がともに中高であるC型○●○▽, 次いでB型○●●▽で発音されるパターンが共有されている。若い世代へ向けB型・C型ともにA型（平板型）での発音が多くなる。

依然として規模は小さいが、生涯変化も両方向（共通語化, 非共通語化）で見られ、2拍名詞に比べれば規模は若干大きめである。非共通語的生涯変化の大部分は、主にB型・C型で起こる。これらの方言回帰現象が、以下に述べる大学生の変異パターンと一致するのは興味深い。

札幌生え抜き大学生の変異から従来の共通語的アクセント類系（表1）とは異なる独自の体系（または従来体系の再編成）が生じつつある可能性が窺える。具体的には、共通語的C型語彙（○●○▽, 小麦・つつじ・心, など）が平板のA型（○●●▼）やB型（○●●▽）に分化、共通語的B型語彙（○●●▽, 毛抜き・小豆・はさみ, など）がA型（○●●▼）やC型（○●○▽）に分化、共通語的A型（○●●▼）語彙（あくび）はD型（●○○▽）またはC型（○●○▽）に揺れを示す、などといった事象が見られる。

- 3) -4. 4拍名詞 老年層の数名を除くほとんどの話者で約80%以上の高い割合を示す。

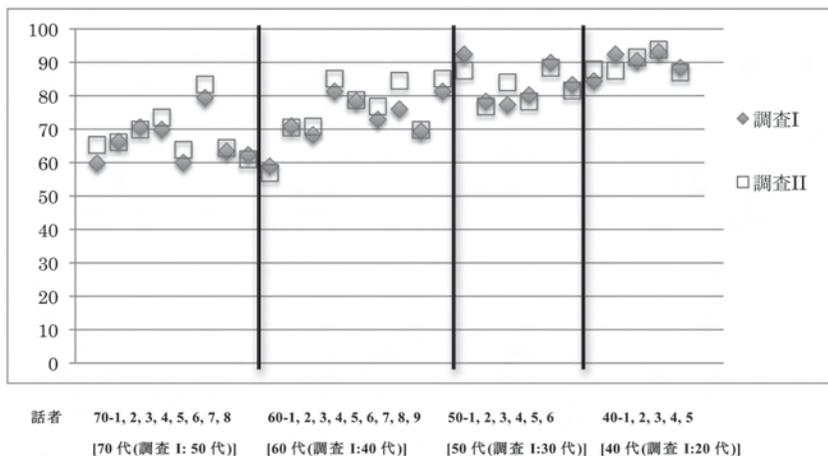
特に「テレビ世代」の50代（表2）で非共通語的生涯変化が目立つ。

グラフ31では、1拍～4拍名詞全体の共通語得点の割合における個別話者の分布を調査I（小野1993）と本パネル調査（調査II）間で対比した（前回報告 [高野2014] の老年層話者も含む）。調査II時点での年齢層ごとに縦線で仕切りを入れ、議論の都合上、グラフ下に話者番号を記載した（例 70-1=70代話者1番）。

グラフ31からは、当然のことながら、共通語化と話者年齢の密接かつ規則的な関係が見取れる。若い世代へ向け右肩上がりに共通語化得点が上昇するばかりでなく、年齢層集団内での揺れが収束し均質になっていくのが分かる。一方、60代・70代の老年層では、同じ年齢層集団内で共通語化がかなり進行している話者と遅れている話者の差が非常に大きいのも分かる。

個々人の経年的変化（生涯変化）に関しては、これまで見てきた通り、先行調査（小野1993）と本実時間パネル調査（調査II）で大きな隔たりを見せる話者はいない。その程度は極めて小規

グラフ31 共通語化得点 (1～4拍名詞) 割合 (%) における年齢層集団別話者分布
調査I (小野1993) vs. 本パネル調査



模ではあるが比較的顕著な話者として、話者70-1 (男性), 60-7 (女性), 50-3 (男性)などは共通語へ向けた生涯変化, 話者50-1 (男性), 40-2 (男性)などは方言形への回帰を示す。被験者集団の総体的動態から外れるこれらの所謂「逸脱者」(outlier)は, 言語変異・変化の社会的意味 (特に動機付け)を知る上で極めて有益な情報を提供してくれる (Labov 2001)。別な機会を設けて, 特に当該話者の社会生活, 日常的コミュニケーション網, 方言接触, および言語意識や態度に焦点を当てた分析を試みたい (高野2014:26-27)。

5. 変異理論的観点からの考察

変異理論 (Labov 1972, 1994, 2001, 2010) は, 言語運用に観察される「揺れ」に内在する秩序 (規則性) の記述, 及び, それに伴う言語変化の諸局面 (起因・埋め込み・伝播・評価) の説明を試みる言語理論体系である。先行研究のレビュー及び筆者によるこれまでの経年的調査の成果から, 札幌市方言の名詞アクセントの共通語化を左右する要因として, 「話者年齢」「名詞の長さ (拍数)」「アクセント類型」などが明らかになってきたわけだが, それ以外の影響因子に言及した研究は過去には見当たらない。また, 共通語化への影響力という点で, 上記3要因間の相対的な力関係やヒエラルキーも判然とししない。もしそれらが明らかになれば, 例えば, 名詞間での進捗の差や今後の変化予測など, 札幌市での名詞アクセントの共通語化がこれまで辿ってきた道筋や今後の方向性について, これまで以上によりの確かな説明が可能になるのではないと思われる。

5.1 VARBRULによる解析

本節では, 変異理論の枠組みで, 当該変異 (名詞アクセントの揺れ) が内包する規則性を統制すると思われる諸要因を作業仮説として設定する。その上で, VARBRULと呼ばれる多変量解析により当該仮説の妥当性を検証し, 解析から得られる蓋然性指数 (probability) を基に共通語化の過去の道筋の把握と今後の変化の動態を推測してみる。

変異 (従属変数, 本研究では「名詞アクセントの共通語化」) に影響を与える要因 (独立変数) は, 一般に「言語内的要因」と「言語外的要因」に分けられ, 後者はさらに「社会的要因」と「ス

札幌市方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査

タイル的要因」に分けられる（松田2004）。本調査では、調査票による文章の読み上げタスクのみにより産出された発話を分析資料としているためスタイル的要因は考慮外となる。また、話者の年齢や性別以外の社会的要因については現在検討中であり^[6]、本実時間調査の最終報告段階で言及する予定である。以下に作業仮説として、「従属変数」及び「独立変数」をリスト化して提示する。

従属変数^[7]： ①共通語的アクセント ②共通語へ向けた生涯変化
 ③方言形への回帰または非共通語の新型を使う生涯変化
 独立変数：[言語内的要因] a) 名詞の拍数（2・3・4拍）^[8]，b) 名詞のアクセント型（平板・頭高・中高・尾高），c) 述部のアクセント核の有無，d) 名詞の出現頻度（1, 2, 3, 4レベル），e) 名詞の親密度（1, 2, 3, 4レベル）
 ※有核名詞のみの解析時に追加：b') 名詞のアクセント型（頭高・中高・尾高），f) アクセント核の母音（広母音あえお・狭母音いう）
 [社会的要因] g) 話者の性別（男・女），h) 話者の年齢層（調査I：50代・40代・30代・20代，調査II：70代・60代・50代・40代）

本稿での新たな試みとして、日常生活における語彙の出現頻度および親密度（馴染み度）を共通語化の揺れと何らかの因果関係があるものと仮定し、すでに公開されている大規模コーパスを援用することで、それらを独立変数（d, e）としてVARBRUL解析に組み込むことにした（リスト内の下線項目）。

「頻度」コーパス（天野・近藤2003b）は、1985年から1998年の14年間に発行された朝日新聞（朝刊・夕刊）を基に形態素解析により構築され、「単語親密度」コーパス（天野・近藤2003a）は、『新明解国語辞典第四版』（金田一他，1989）の全見出し語を基に、7段階尺度（1：低——7：高）による親密度の評定実験により構築されたものである^[9]。VARBRUL解析にあたっては、上記のデータベースから本調査の分析対象となる名詞の頻度・親密度を調べ、拍数ごとに序列化し、数値上の比較的顕著な切れ目でグループ分けをした。結果的に表5のような4レベルでのグループ分け（1：最上位～4：最下位）になった^[10]。

なお、VARBRUL解析では、上記のリスト化された独立変数（a～h）が各々に単独ではなく、同時多発的に従属変数の産出に影響を与えると想定されており、産出に対する正（促進）と負（抑制）の両面の効力の対比から独立変数間の階層的な力関係が明らかになる（Guy 1987）。また、VARBRUL解析では、上記リストで提起された仮説モデルが実際の言語運用データ（ここでは名詞アクセントの読み上げ）の揺れをどれだけの確に説明しうるかという「仮説モデルと変異の適合度」も数値化してくれるため、より適切な仮説モデルへの改訂にも役立つ（Preston 1989）。

表6は、VARBRUL解析に投入したトークン総数（3584）と従属変数のタイプ別内訳である。これらには、前稿（高野2014）で報告した老年層（70代・60代）話者も含まれる。

表5 分析対象名詞の出現頻度および親密度のレベル分け

		2拍名詞（60語） ^[11]	3拍名詞（46語） ^[12]	4拍名詞（25語） ^[13]
頻度	レベル1	1.5万語以上（10語）	4万語以上（7語）	3千語以上（5語）
	レベル2	1万語以上1.5万語未満（7語）	1万語以上4万語未満（4語）	1.3千語以上3千語未満（5語）
	レベル3	5千語以上1万語未満（12語）	5千語以上1万語未満（7語）	3百語以上1千語未満（7語）
	レベル4	5千語未満（30語）	5千語未満（27語）	3百語未満（8語）
親密度	レベル1	6.656 - 6.469（15語）	6.750 - 6.500（9語）	6.562 - 6.312（7語）
	レベル2	6.438 - 6.281（14語）	6.469 - 6.312（11語）	6.250 - 6.156（5語）
	レベル3	6.250 - 5.781（23語）	6.281 - 6.000（14語）	6.094 - 5.750（8語）
	レベル4	5.625以下（8語）	5.906以下（12語）	5.719以下（4語）

表 6 全経年データにおける従属変数のタイプ別分散

	共通語的 アクセント	方言的 アクセント	共通語への 生涯変化	非共通語的 生涯変化	合計 3668発話 28名 (男12/女16) からの解 析トークン実数 ^[14]
調査I (1990年)	2503 (69.8%)	1081 (30.2%)			3584
調査II (2010-12年)	2539 (70.8%)	1045 (29.2%)			3584
調査I (1990年) ※有核名詞のみ	1670 (66.2%)	851 (33.8%)			2521
調査II (2010-12年) ※有核名詞のみ	1682 (66.7%)	839 (33.3%)			2521
調査I → 調査II			190 (5.2%)	151 (4.1%)	3640

5.2 VARBRUL 解析の結果

以下の各表内における各独立変数の効果 (Weight) は0~1の間で示され, 0.5 (中立値, 即ち, 促進効果も抑制効果もない) を境に「従属変数の産出を促進」する力が強まるほど1へ近づく値を示し, 逆に「産出を抑制」する力が強まるほど0へ近い値となる。これらの効果値は「蓋然性指数」(probability) とも解釈でき, 本結果は本調査の被験者および分析対象名詞群のみに限定的に当てはまるというわけではなく, 同類の言語共同体または社会集団 (例えば, 札幌市) の他成員が類似のコンテキスト下で類似の発話をした場合, 同様の結果が得られるという推測が統計学的に成り立つ。

また, 各表内で*印が付与された独立変数は, 当該従属変数の産出に対する貢献度・抑制力における全独立変数間の相対的力関係を勘案した上で, その影響力が「統計学的に有意」(p<.05) であることを示す。各独立変数が有意か否かの選別は, すべてステップ方式解析により行われた。なお, 独立変数2段目の「アクセントタイプ」は, 以下に掲載するすべての表やグラフにおいて共通語での分類を示すこととする。

表7から, 各独立変数が従属変数 (共通語的アクセントの使用) に与える影響力において, 調査Iと調査II間での大きな隔たりは見られないことが分かる。しかし, 「アクセントタイプ」において, 中高アクセント (調査I: 0.48, 調査II: 0.43) と頭高アクセント (調査I: 0.44, 調査II: 0.43)

表 7 共通語的アクセントの使用 (従属変数): 全3584トークン

独立変数	調査I (1990)			調査II (2010-12)		
*語の拍数: 4拍	0.64	(82.7%)	[556/672]	0.62	(81.5%)	[548/672]
2拍	0.56	(72.3%)	[1195/1652]	0.57	(73.8%)	[1219/1652]
3拍	0.35	(59.7%)	[752/1260]	0.35	(61.3%)	[772/1260]
*アクセントタイプ:						
平板	0.68	(78.4%)	[833/1063]	0.69	(80.6%)	[857/1063]
中高	0.48	(72.9%)	[266/365]	0.44	(66.5%)	[801/1204]
頭高	0.44	(65.2%)	[785/1204]	0.43	(70.1%)	[256/365]
尾高	0.38	(65.0%)	[619/952]	0.38	(65.7%)	[625/952]
*述部が有核か無核か:						
無核	0.57	(75.8%)	[910/1200]	0.57	(76.2%)	[915/1200]
有核	0.46	(66.8%)	[1593/2384]	0.46	(68.1%)	[1624/2384]
*話者年齢層:						
20代→40代	0.75	(86.9%)	[445/512]	0.74	(86.9%)	[445/512]
30代→50代	0.60	(77.8%)	[697/896]	0.59	(78.1%)	[700/896]
40代→60代	0.45	(67.1%)	[687/1024]	0.46	(69.1%)	[708/1024]
50代→70代	0.35	(58.5%)	[674/1152]	0.35	(59.5%)	[686/1152]
*名詞親密度:						
1	0.63	(78.7%)	[661/840]	0.62	(78.3%)	[658/840]
2	0.51	(73.0%)	[613/840]	0.53	(74.4%)	[938/1260]
3	0.51	(72.1%)	[909/1260]	0.50	(73.7%)	[619/840]
4	0.31	(49.7%)	[320/644]	0.31	(50.3%)	[324/644]
話者の性別:						
女性	0.51	(69.4%)	[1422/2048]	0.50	(70.8%)	[1449/2048]
男性	0.49	(70.4%)	[1081/1536]	0.50	(71.0%)	[1090/1536]
(*) 名詞頻度:						
1	0.62	(76.2%)	[491/644]	0.63	(77.6%)	[500/644]
2	0.57	(77.4%)	[325/420]	0.55	(76.7%)	[322/420]
4	0.47	(67.5%)	[1210/1792]	0.47	(68.8%)	[1233/1792]
3	0.42	(65.0%)	[477/728]	0.42	(66.5%)	[484/728]

Input = 0.73 (調査I), 0.74 (調査II), Chi-square per cell = 1.88 (調査I), 1.87 (調査II)

札幌市方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査

が二調査間で逆転している。これについては、次節で考察を加えたい。

また、述部がアクセント核を持たない文脈の方が、主部の名詞は共通語的アクセントに成り易かったことも分かる。しかし、これは「読み上げる」という人工的な発話行為において、述部にアクセント核がないことで、より主部の発話へのモニターの効きが増し、共通語的アクセントの産出が多かったという認知的作用の可能性もあるだろう。自然談話でも同じ結果となるのか、興味深いところである。

一方、「名詞親密度」においては、程度2（調査I: 0.51, 調査II: 0.50）と程度3（調査I: 0.51, 調査II: 0.53）の逆転が見られるが、どれも中立値0.5（影響力がない）に近い値を示していることから極めて微細な差異かと思われる。調査I・IIともに、名詞の親密度（馴染み度）が高ければより共通語化しやすく、低ければ方言的アクセントを留める傾向が認められる。この結果は、方言的語彙の馴染み度とその使用者にとって高ければアクセント型の個人差が小さく、馴染み度が低ければ個人差は大きいとする佐藤他（2014）の見解と方向性では一致するように思われる。

なお、表7で示された独立変数群と当該変異データの適合度（つまり、仮説がデータを説明できている程度）は、表末「Chi-square per cell」値によって判定でき、「1.5以下」が適合を示す許容範囲とされている（Preston 1989）。当該解析では、調査I（1990）が1.88、調査II（2010-12）が1.87と若干それを上回るため、当該変異を支配する他要因の存在の可能性や独立変数内の詳細設定に多少の改良の余地があることを示唆する結果となっている。今後も機会など許せば、さらなる改良を試みたい。

これと関連し、分析対象名詞の「親密度」の代わりに「頻度」を投入し解析を行ったところ、当該変数は「親密度」同様、統計学的に有意とされた。しかし、本仮説モデルと当該変異データの適合度が調査I（1990）で2.33、調査II（2010-12）で2.40に大きく悪化したことから、名詞頻度はその後の解析に含めないこととした。

表8では、全トークンを分析対象とした表7の結果を基に「有核アクセント名詞」のみを解析した。仮説モデルと当該変異データの適合度（仮説がデータを説明できる度合い）は、表7よりもさらに悪化した（調査I: 1.96, 調査II: 1.90）。

興味深いことに、調査Iでアクセントタイプ（共通語型）は統計的に有意とは選定されなかつ

表8 共通語的アクセントの使用（従属変数）： 有核名詞のみ（2521トークン）

独立変数	調査I (1990)	調査II (2010-12)
* 語の拍数： 4拍	0.69 (83.2% [420/505])	0.70 (81.5% [548/672])
2拍	0.49 (66.9% [899/1344])	0.50 (73.8% [1219/1652])
3拍	0.37 (52.2% [351/672])	0.35 (61.3% [772/1260])
アクセントタイプ：		
頭高	0.52 (65.2% [785/1204])	*頭高 0.54 (66.5% [801/1204])
中高	0.49 (72.9% [266/365])	*尾高 0.48 (70.1% [256/365])
尾高	0.48 (65.0% [619/952])	*中高 0.43 (65.7% [625/952])
アクセント核の母音： 広母音	0.50 (67.7% [1148/1695])	0.51 (76.2% [915/1200])
狭母音	0.50 (63.2% [522/826])	0.49 (68.1% [1624/2384])
* 述部が有核か無核か：無核	0.55 (73.5% [691/940])	0.54 (76.2% [915/1200])
有核	0.47 (61.9% [979/1581])	0.48 (68.1% [1624/2384])
* 話者年齢層： 20代→40代	0.75 (84.7% [305/360])	0.76 (86.1% [551/640])
30代→50代	0.62 (76.3% [481/630])	0.59 (77.3% [594/768])
40代→60代	0.44 (62.4% [449/720])	0.43 (59.4% [937/1577])
50代→70代	0.34 (53.6% [435/811])	0.34 (58.5% [674/1152])
* 名詞親密度： 1	0.63 (77.9% [545/700])	0.61 (78.3% [658/840])
3	0.53 (70.2% [609/868])	0.54 (74.4% [938/1260])
2	0.46 (63.5% [303/477])	0.47 (73.7% [619/840])
4	0.30 (44.7% [213/476])	0.30 (50.3% [324/644])
話者の性別： 女性	0.51 (66.3% [955/1440])	0.50 (70.8% [1449/2048])
男性	0.48 (66.1% [715/1081])	0.49 (71.0% [1090/1536])

Input = 0.69 (調査I), 0.70 (調査II), Chi-square per cell = 1.96 (調査I), 1.90 (調査II)

たが(頭高0.52, 中高0.49, 尾高0.48), 調査IIでは有意とされた(頭高0.54, 尾高0.48, 中高0.43)。この結果は, 過去20年間で, 生涯変化が全体的な割合としては確認できなかったものの, 言語内的要因(アクセント型)の重み付けにおいて何らかの再編成が生じたことを意味する。表8の数値及びランクから, 特に中高アクセント項目(共通語型○●○▽:「小麦」「つつじ」「心」, ○●○○▽:「生き物」「すずらん」「生け花」「二次会」等, ○●●○▽:「足音」「大根」「生き物」「小刀」「雷」等)が共通語化において遅れをとり, 頭高アクセント項目(共通語型●○▽:「箸」「空」「雨」「窓」等, ●○○▽:「姿」「命」「さざえ」「朝日」等, ●○○○▽:「挨拶」「チャンネル」「たんぼほ」等)が先行していることが分かる。上掲表7における全トークンの分析でもそうであったように, 特に今回調査(調査II)で見られる「中高アクセントの共通語化における遅れ」については, 次節でさらに考察を加える。

一方, 予想外の結果として, アクセント核を持つ母音の特性(広母音あえお・狭母音いう)は両調査で有意とはならなかった(調査I: 広0.50, 狭0.50; 調査II: 広0.51, 狭0.49)。また, 性差に関しても, 表7と同様, 両調査ともに有意にはならなかった。

次に, 表8での結果を受け, 生涯変化と言語内的要因の規則的関係の検証を行った。表9は, 調査Iから調査IIにかけて見られた「(方言型から)共通語型に向けた個人語の変化」の解析結果を示し, 表10は逆に「(共通語型から)方言型に回帰もしくは非共通語的新型への変化」の解析結果を示す。どちらの結果においても, 仮説モデルと当該変異データの適合度(仮説がデータを説明できている程度)は格段に上がり, 許容範囲(1.5以下)をはるかに下回った(表9では0.80, 表10では0.93)。

表9・表10の結果から, 生涯変化はその方向性に関わりなく, 主に共通語化が最も遅れている3拍名詞で起こっていることが分かる。また, アクセントタイプも尾高・中高タイプが関与しており, 特に方言回帰(または非共通語的)の生涯変化については, 中高型の名詞に顕著に見られる。また表9からは, 共通語へ向けた生涯変化を押し進める社会集団は「女性」であることが分かる。一方, 表10から, 方言回帰または非共通語的新型の採用を先導していると思われる社会集団は, 現在50代(調査I当時30代)の住民であることなども把握できる。

最後に, 分析対象名詞の語彙親密度においても, その方向性に関わりなく, 日常生活の中で被

表9 共通語的アクセントへの生涯変化(従属変数)(3640トークン)

独立変数	方言型 → 共通語型	
*語の拍数:		
3拍	0.58 (6.8%)	[88/1288]
2拍	0.51 (5.0%)	[84/1680]
4拍	0.34 (2.7%)	[18/672]
*アクセントタイプ:		
尾高	0.57 (6.3%)	[60/952]
中高	0.55 (4.7%)	[17/365]
平仮	0.50 (5.6%)	[61/1091]
頭高	0.43 (4.2%)	[52/1232]
述部が有核か無核か:		
無核	0.46 (4.2%)	[50/1201]
有核	0.52 (5.7%)	[140/2439]
話者年齢層:		
20代→40代	0.41 (3.7%)	[24/650]
30代→50代	0.52 (5.4%)	[42/780]
40代→60代	0.50 (5.2%)	[61/1170]
50代→70代	0.54 (6.1%)	[63/1040]
*名詞親密度:		
1	0.43 (3.9%)	[34/868]
2	0.45 (4.3%)	[37/868]
3	0.53 (5.4%)	[68/1260]
4	0.60 (7.9%)	[51/644]
*話者の性別:		
女性	0.54 (5.9%)	[123/2080]
男性	0.45 (4.3%)	[67/1560]

Input = 0.05, Chi-square per cell = 0.80

札幌市方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査

表10 非共通語的アクセントへの生涯変化 (従属変数) (3640トークン)

独立変数	共通語型 → 非共通語型
* 語の拍数: 3拍 2拍 4拍	0.57 (5.2% [67/1288]) 0.48 (3.5% [58/1680]) 0.43 (3.9% [26/672])
* アクセントタイプ: 中高 尾高 平板 頭高	0.69 (7.4% [27/365]) 0.60 (5.6% [53/952]) 0.44 (3.3% [36/1094]) 0.41 (2.8% [35/1232])
述部が有核か無核か: 無核 有核	0.46 (3.7% [45/1201]) 0.52 (4.3% [106/2439])
* 話者年齢層: 20代→40代 30代→50代 40代→60代 50代→70代	0.40 (2.8% [18/650]) 0.60 (5.8% [45/780]) 0.46 (3.5% [41/1170]) 0.53 (4.5% [47/1040])
* 名詞親密度: 1 2 3 4	0.50 (4.1% [36/868]) 0.48 (3.5% [30/868]) 0.44 (3.1% [39/1260]) 0.63 (7.1% [46/644])
話者の性別: 女性 男性	0.53 (4.5% [94/2080]) 0.46 (3.7% [57/1560])

Input = 0.04, Chi-square per cell = 0.93

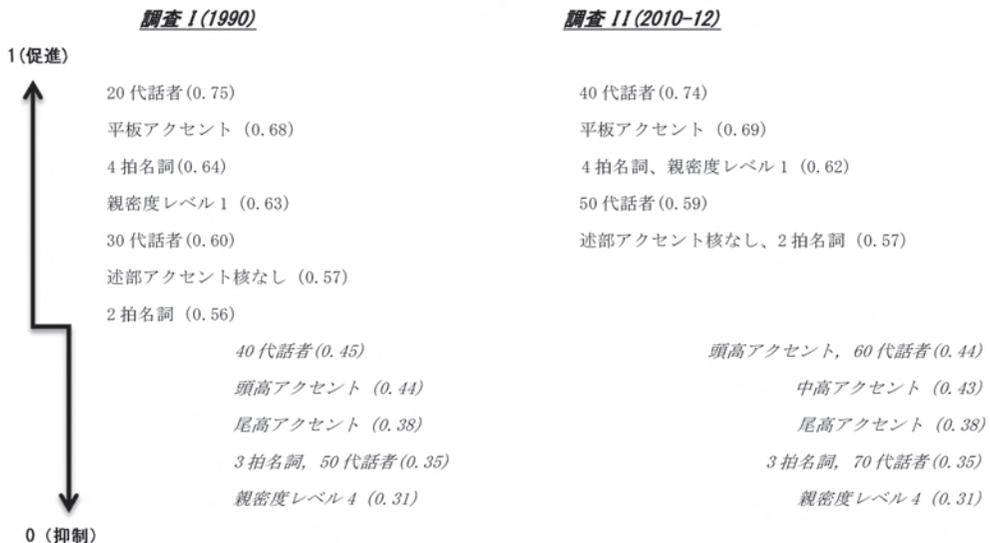
験者にとって親密度の低い名詞が個人語の変化に加担していることが分かる。一方、当該名詞の語彙頻度については、今回の生涯変化の解析において、両方向ともに統計学的に有意とはならなかったことを付け加えておく。

5.3 札幌市方言名詞アクセントの変異を支配する「拘束要因マップ」の提案

前節5.2におけるVARBRUL解析の結果、図2～4で示す独立変数間の相対的關係が明らかになった。図内では統計学的に有意 ($p < .05$) とされる要因のみを挙げた。注記として、これらは皆、VARBRULが行うステップ方式解析で統計学的に有意として選別された要因である。

図2では、調査I (1990)・調査II (2010-12) 間で、独立変数の相対的ランクおよび個々の効果値ともに、一部の項目 (中高アクセント) を除き、ほぼ完璧に近い合致が見られる^[15]。これ

図2 札幌市方言名詞アクセントの共通語化を拘束する要因マップ:
調査 I (1990) vs. 調査 II (2010-12)



はどちらの解析でも同一文の読み上げタスクにより産出された音声分析されていることにもよるだろうが、約20年を経ても個々人の言語運用上の変異を支配する拘束要因間の力関係や重みがほぼ普遍的に保たれていることを示唆する。

また、図2からは、この20年間で札幌市方言名詞アクセントの共通語化の系譜がある程度は読み取れる。若い世代の話者を中心に、日常生活の中で最も馴染み度が高く、(共通語体系では)平板式アクセントを持つ4拍名詞(表11, 例:牛乳・チャンネル)から共通語化が始まり、同じく平板の2拍名詞(表11, 例:水・風)が追従したと読み取れる(cf.,佐藤他2014)。また、述部がアクセント核を持たない文脈の方が、主部の名詞は共通語的アクセントに成り易かったことも分かる。

一方、図2下部の抑制要因のヒエラルキーから、この20年間で調査I当時の中年層(40代・50代)以上は共通語化にあまり染まらず、日常生活の中で最も馴染みの薄い、(共通語体系では)尾高アクセントの3拍名詞(表11, 例:刀・毛抜き・小豆)を筆頭に、続いて同類の2拍名詞(表11, 例:旗)で方言的アクセントが保持されてきたことも分かる(cf.,佐藤他2014)。

表11 親密度レベル1(高)と親密度レベル4(低)に対応する分析対象名詞^[16]

最高親密度(レベル1)名詞	最低親密度(レベル4)名詞
(1拍) 絵・木・血・歯・手, (2拍) 耳・夏・海・水・冬・花・雨・風・秋・川・春・音・石・雪・色, (3拍) テレビ・いちご・ビール・電話・カ・心・電車・言葉・ラジオ, (4拍) 牛乳・弟・妹・果物・たんぼぼ・チャンネル・コスモス	(1拍) 柄, (2拍) 箸・帯・釜・旗・露・蜘蛛・鎌・鮎, (3拍) 柱・さざえ・刀・小麦・鯨・つつじ・鳥・紅葉・兎・毛抜き・狐・小豆, (4拍) 二次会・鶏・小刀

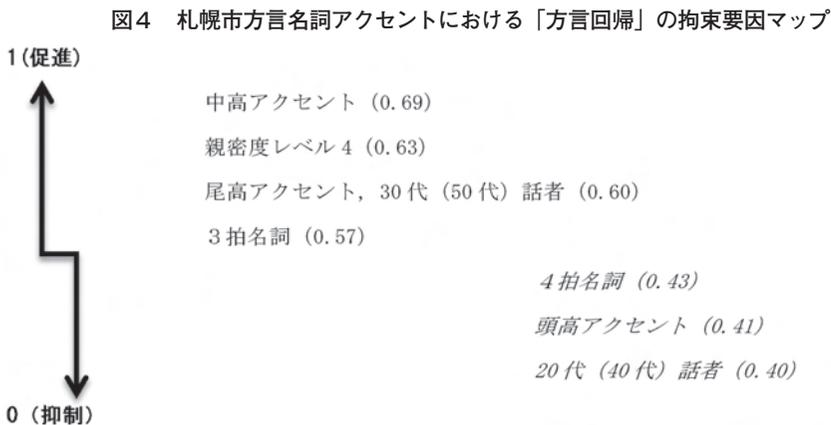
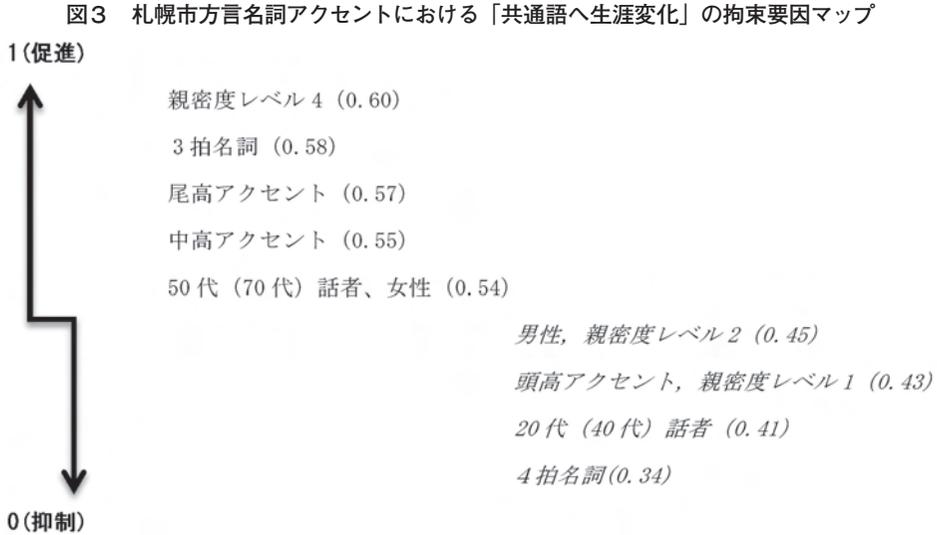
また、共通語化を巡る今後の展開に関しては、特に調査IIのみで抑制要因として登場した「(共通語では)中高アクセント」(0.43)を持つ名詞が注目に値する。中でも特に馴染み度が最も低いレベルに属する名詞(表11, 例:小麦・つつじ・二次会・小刀)は、方言的(または非共通語的新型)アクセントが発現する最有力候補となるであろう。今後は(共通語では)中高アクセントを持つ語彙が、「北海道方言的響き」を指標し保持していく代表格となっていくのかもしれない。

以上のような各種拘束要因間の組織図は、本調査で検証した被験者集団および名詞群に限らず、一般論として上記の諸条件を満たす名詞に当てはまるものと推測される。

前節でも指摘したように、今回の経年的調査において、被験者の生涯変化は、共通語化と方言回帰(または非共通語的新型の使用)の両方向で極めて小規模に見られたわけが、第4節グラフ31でも眺めたように個人間での揺れも見られる。この揺れに何らかの規則性が内包されていないかを表9・表10で解析し、その結果、図3(共通語への生涯変化)と図4(方言回帰の生涯変化)で示す拘束要因マップが得られた。

その効果はそれほど強いわけではないが、特に「語彙親密度」と「アクセント型」が個人語の経年的変化を左右する要因になっていることが分かる。共通語へ向けた生涯変化(図3)については、共通語化の遅れている尾高・中高型アクセント名詞の中でも、特に日常生活で最も馴染みの浅い(レベル4)3拍名詞(表9, 例:刀・小麦・つつじ・小豆)がその筆頭候補となり得る。当然のことながら、すでに共通語化が進んでしまっている4拍名詞や馴染みの深い(親密度1)名詞、および4拍名詞ほど共通語化が進んでいない2拍名詞なども、生涯変化の候補には入ってこない。また、この変化で唯一、「話者の性別」が有意と判定され、女性(0.54)が男性をリードしている(男性はむしろ拒絶[0.45])。共通語化が最も遅れている調査I当時50代(現在70代)の話者が、このタイプの生涯変化に参加していることも示されている。

ここで先節4の(1)で言及した先行調査成果(横山・真田2010, 横山2010)との不整合について



検討を加えたい。これらの先行調査では、被験者に絵が提示され発話された語彙5項目（セナカ [LHH]・カラス [HLL]・ウチワ [LHL]・ネコ [HL]・ハタ [LH]、いずれも共通語的アクセント型を示す）のアクセントの経年的変化が分析されている。「共通語へ向けた生涯変化」を司るとされる拘束要因マップ（図3）から、促進への貢献度が最も強いとされる「親密度レベル」を当該5名詞について調べたところ、セナカ（6.344、レベル2）、カラス（6.188、レベル3）、ウチワ（5.969、レベル3～4）、ネコ（6.375、レベル2）、ハタ（5.656、レベル3～4）であることが分かった（天野・近藤2003a）^[17]。

本研究で明らかになった「親密度レベルが低い名詞ほど共通語化へ向けた生涯変化を起こしやすく、高い名詞ほど当該変化が抑制される」という規則性から、当該5名詞のうち、カラス・ウチワ・ハタなどは親密度が比較的低いタイプの名詞（レベル3～4）として共通語化の波に吞まれ易い名詞と言え、横山・真田（2010）や横山（2010）による一般化においては、分析対象となる名詞の語彙特性というバイアスの介在が否定できなくはない。また、図3からは（札幌市方言に限定的であるかもしれないが）、名詞の拍数も独立変数として重要視されるべきであり、3拍名詞は共

通語へ向けた生涯変化の先鋒的存在でもある。以上のことから、より多くの異なる親密度や拍数の名詞からなるコーパスを分析対象とした場合にも同様の結論に至るのかどうか、再検証の余地もあるのではないだろうか。

一方、方言回帰（または非共通語的新型）への生涯変化（図4）については、上でも指摘した「北海道方言的指標」となり得る「(共通語型では) 中高アクセント」で、馴染みの最も浅い3拍名詞（表11、例：小麦・つつじ）がその筆頭候補となっている（cf., 佐藤他2014）。ここでも2拍名詞は有意な要因として挙がってこない。また、年齢層集団も方言回帰を左右する要因となっており、その中心勢力は「テレビ世代」の調査 I 当時30代（現在50代）の話者集団で（cf., Ota & Takano 2014）、それよりも若い世代（調査 I 当時20代、現在40代）では、むしろ方言回帰的な生涯変化を拒絶してきたことも分かる。

6. おわりに

今後は、1990年当時20代であった最も若い世代の話者（12名）の調査が未だ終わっていないため、できるだけ早い時期に消息をつきとめデータを収集するつもりである。また、当時中学生・小学生として調査Iに参加した被験者にもできるだけ接触を試みたい。

最終報告では、それらの話者もデータベースに加え、特に話者要因としての「社会的要因」のカテゴリー化を中心に、今回提案した言語内的要因も含めた様々な影響因子のネットワークの中で、札幌市方言アクセントの共通語化および特定方向への生涯変化がどのように押し進められてきたのか、そして今後どうなっていくのか等といった因果関係の総合的な解明を目指していくつもりである。

【謝辞】

本調査は、研究の趣旨をお汲み取りいただき、先行調査資料のご提供をいただいた小野米一先生、および再度被験者としてご協力をいただいた山鼻住民の皆様のお陰で成り立っています。この場をお借りし、厚く御礼を申し上げます。また、分析作業の補助をしていただいた中村裕介氏、丸和沙氏、佐藤萌氏、野口詩織氏にも心より感謝を申し上げます。

注

- 1 本稿は、文部科学省科学研究費・基盤研究B（No.25284082）『変異理論の新展開と日本語変異データの多角的分析』（2013～2015年度、代表者・松田謙次郎）からの研究助成を受けている。
- 2 先行調査に参加した被験者を再調査し、前回調査以降の経年的変化を各被験者ごとに見極める方法。今回の場合、前回調査は1990年に行われ、それから約四半世紀後の2010～2012年に本追跡調査が行われた。
- 3 辞退・不明・死亡・転居などで70歳代話者17名中7名、60歳代話者15名中7名、50歳代話者16名中7名、合計21名が収集不可能となった。
- 4 1990年調査の曲線は、20代以上の全被験者の年齢層集団別平均値を反映しているが、本パネル調査の曲線は、各年齢層集団に属する成員の一部の平均値にすぎないため、二曲線は完璧に対等な関係とは言えない。
- 5 4拍名詞については、1990年調査の結果開示（小野1993）において把握しきれない部分があるため、ここでの図示には含めなかった。

札幌市方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査

- 6 被験者の共通語・方言へ向ける意識や態度（言語イデオロギー）、日常生活における他方言との接触、社会網、コミュニケーションネットワークなどのカテゴリー化を検討中である。
- 7 これら3種類の従属変数のVARBRUL解析は、一つずつ個別に行われた。
- 8 1拍名詞はどの世代でもほとんど共通語化してしまっているため本解析からは外す。
- 9 本稿では、評定実験の各種モードの中から、文字単語と音声単語の提示開始時点を同期させて被験者に提示する「文字音声同時提示モード」の数値を解析に利用した。
- 10 VARBRUL解析は、独立変数間の相互作用（何らかの関連がある）を許さない。語彙の頻度と親密度は中程度の相関を持つことがすでに証明されているため（天野・近藤2003b）、当該二変数については同一の解析に含まないよう適宜入れ替えをして解析作業を行った。
- 11 語彙頻度のうち「風」（が吹く）はデータベースに含まれていないため解析から除外した。
- 12 語彙頻度のうち「命」（が惜しい）はデータベースに含まれていないため解析から除外した。
- 13 語彙親密度のうち「すずらん」（が咲く）はデータベースに含まれていないため解析から除外した。
- 14 注11～13で指摘したように、語彙頻度・親密度についての分析の都合上、分析から除外しなければならない名詞語彙があったため、VARBRUL解析に投入したトークンの実数とは異なる。
- 15 図2は、表7での結果をベースに作成している。
- 16 参考までに表内には1拍名詞も挙げておく。
- 17 絵のみを刺激とする発話であるため、「文字音声同時提示モード」による親密度値ではなく、「音声単語親密度」の値を拾った。注9も併せて参照。

参考文献

- 天野成昭・近藤公久（編著）（2003a）『NTTデータベースシリーズ 日本語の語彙特性 第1巻 単語親密度』三省堂
- _____.（編著）（2003b）『NTTデータベースシリーズ 日本語の語彙特性 第7巻 頻度①』三省堂
- 尾崎善光（1986）「社会言語学的アプローチから見る札幌市のアクセントの変遷～名詞篇～」日本学報 第6号 67～110頁
- 小野米一（1991）「札幌市方言多人数調査票について」『東日本の音声～調査票編～』日本語音声における韻律の特徴：東日本における音声の収集と研究（研究代表者 加藤正信）41～59頁
- _____.（1993）「札幌市方言多人数調査資料について」『東日本の音声 論文篇（3）主要都市多人数調査（札幌市・名古屋市）報告』研究成果報告書（研究代表者 加藤正信）51～86頁
- 佐藤和之・米田正人（1999）『どうなる日本のことば ～方言と共通語のゆくえ～』大修館書店
- 高野照司.（2011）「札幌方言名詞アクセントの実時間研究 ～山鼻地区パネル調査 第一次報告」北海道方言研究会会報 第88号 40～58頁
- _____.（2014）「札幌方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査 ～老年層話者の『生涯変化』に着目して～」北星論集 第52巻 第1号 13～29頁
- 馬瀬良雄（1996）「テレビと地域語の変容」日本語学 第15巻, 第10号, 13-27頁
- 松田謙次郎（2004）「ことばのバリエーション研究」『ことばの科学ハンドブック』研究社
- _____.（2006）「VARBRULプログラムとは何か」Talks No.9, 神戸松蔭言語科学研究所
- 佐藤亮一・米田正人・阿部貴人・佐藤和之・水野義道（2014）「俚言の馴染み度とアクセント型の個人差～鶴岡市調査から～」第98回日本方言研究会 研究発表論文集 41～48頁
- 横山詔一（2010）「音声共通語化の予測と検証」日本音声学会 特別講演2
- 横山詔一・真田治子（2010）「言語の生涯習得モデルによる共通語化予測」『日本語の研究』第6巻 2号 31～44頁
- Chambers, J.K. (2003). *Sociolinguistic Theory (Second Edition)*. Oxford: Blackwell.
- Guy, G. (1987). Advanced varbrul analysis. In *Linguistic Change and Contact: Proceedings of the 16th Annual Conference on New Ways of Analyzing Variation*. Austin, TX., pp. 124-36.
- Labov, W. (1972). *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- _____. (1994). *Principles of Linguistic Change: Internal Factors*. Cambridge, MA: Blackwell.
- _____. (2001). *Principles of Linguistic Change: Social Factors*. Malden, MA: Blackwell.

- _____. (2010). *Principles of Linguistic Change: Cognitive and Cultural Factors*. Malden, MA: Wiley-Blackwell.
- Ota, I., & Takano, S. (2014). "The media influence on language change in Japanese sociolinguistic contexts." In J. Androutsopoulos (ed.), *Mediatisation and Sociolinguistic Change*. Mouton de Gruyter. pp.171–203.
- Preston, D. (1989). *Sociolinguistics and Second Language Variation*. New York: Basil Blackwell.
- Sankoff, D., & Labov, W. (1979). On the uses of variable rules. *Language in Society* 8: 189-222.
- Stuart-Smith, J., Pryce, G., Timmins, C., & Gunter, B. (2013). Television can also be a factor in language change: Evidence from an urban dialect. *Language* 89(3): 1-36.
- Trudgill, P. (1972). Sex, covert prestige and linguistic change in the urban British English of Norwich. *Language in Society* 1: 179–95.
- Weinreich, U., Labov, W., Herzog, M. I. (1968). Empirical foundations for a theory of language change. In W. P. Lehmann & Y. Malkiel (eds.), *Directions For Historical Linguistics: A Symposium*. Austin, TX: University of Texas Press. Pp. 95–188.